

①大学(薬・香薬以外)・短大

② 入試区分

公募推薦Ⅱ期

③ 出題科目

現代の国語・言語文化（古文・漢文を除く）

④ 出題の意図

問題の一は、小川洋子『物語の役割』から出題。『アンネの日記』の文学としての意義について論じた評論文。設問では、キーセンテンスの解釈、キーワード(1)の抜き出し、キーワード(2)の具体的説明、表現技巧の理解、漢字の書き取り、本文の趣旨を踏まえた理由説明などを問うている。問題の二は、安部公房の文章「仮説の文学」から出題。科学の世界と異常な世界との関係について日常性の秩序との比較を軸として論じた論説文。設問では、漢字の読みと書き取り、慣用句の意味、品詞の理解、抽象的表現の具体的把握（選択・記述）などを問うている。問題一はエッセイ風の評論文を、問題二は本格的な論説文を読み解く問題となっている。

現代の国語・言語文化「古文・漢文を除く」

一 次の文章を読んで、あとの設問（1～6）に答えよ。

やがて中学校へ進み、いよいよ決定的な本と出合うことになります。『アンネの日記』です。この本については、今までいろいろな機会に書いたりお話ししてきましたが、たとえしつこいと嫌がられても、何度でもこの日記の素晴らしさについては主張すべきだと考えています。

まず何より、思春期のしかも少女の複雑な内面を、これほど生き生きと描写した文学は他にありません。死が言葉で表現できないのと同じ意味で、思春期もまた、本来表現不可能な時代です。それを思春期の只中^{ただなか}にあった少女がやってのけたのです。言葉の豊かさ、キティという架空の友だちを持つてくるという、現実との絶妙な距離の測り方、自己の内面を見つめる視線の確かさ、大人たちに向ける批判精神、ユーモアのセンス……、どれを取っても十四、五歳の少女とはとうてい思えない才能です。

この日記を読めば、二年あまりの間、あの狭い場所に閉じ込められた状態で、実にさまざまな出来事が起こり、アンネを含めた子供たちがいかに成長したかが分かります。隠れ家生活といっても、ただじつと丸くなって隠れていたわけではありません。母親との対立に苦悩し、（支援者の名前を借りて行っていた）通信教育での勉強に喜びを見出し、将来の夢を描き、支援者たちへの感謝を忘れず、別れてきた友達へ思いを馳^はせ、性の問題に悩み、ペーターとの淡い恋に胸をこがす……。息を殺し、存在を消して過^こさなければならぬ、単調であったはずの日常が、アンネにとってはたいへん濃密なものでした。それが、この日記からはありありと伝わってきます。

私はここでも、⁽¹⁾ディッカー先生の絵画教室の子供たちを思い出します。彼らが収容所で、絵を描くことによって自由

を味わい、自我を獲得したのと全く同じことを、アンネ・フランクは隠れ家で成し遂げました。^①

河合隼雄さんは、『物語を生きる——今は昔、昔は今』の中で、「子どもが大人になることは大変なことであり、短期間に心身共大変革を遂げるので、その間は何らかの強い守りが必要とする。さなぎが固い殻に守られているのと同じである」と述べていらっしやいます。その例として、中世の物語の『鉢かづき』^②の鉢、『うばかは』の皮、あるいは西洋

のお話として『白雪姫』のガラスの棺^{ひつぎ}、『ラプンツェル』の塔、『眠りの森の美女』の百年の眠り、などを挙げています。テレジンの子どもたちにとっての収容所、そしてアンネにとっての隠れ家は、悪意によってもたらされたマイナスの場所でありましたが、周囲の大人たちや本人の才能によって、そこを強い守りとすることができました。その強固な殻の中で、自分とは何かを問いかけ、それを表現し、自己を高めていったのです。一旦閉じこめることによって、外の世界と適度な距離を取り、自分と一対一で向き合うことによって、孤独を手に入れる。その孤独が人を成長させるのだと思います。サナギになって一旦死んだように静かになったあと、昆虫が劇的な変化を見せて成虫になると同じです。

アンネ・フランクの場合も、もちろん彼女だって平和な時代に生まれ、のびのびと才能を発揮すべきでした。たとえば『アンネの日記』という人類の財産を残さなくても、彼女には生きる当然の権利がありました。しかしそのことを十分に承知したうえで、この特別な才能を与えられた少女が、隠れ家という殻に閉じ込められたことには、深い意味があった。^③彼女は生まれながらに使命を背負っていて、それを見事なまでに果たしたと思います。

私自身、もし思春期の私を守ってくれる殻があったとしたら、それは読書であったと確信しています。読書をしている時だけは、本の中の世界に閉じこもり、自分を現実から守ることができた。そう思っています。だからこそ、本たちには今でも感謝したい気持ちです。

^④『ファール昆虫記』の中でファールは、スカラベ^②・サクレのサナギについて次のように描写しています。

「スカラベのサナギの美しさはたとえようありません。そのととのった形といい、半透明でハチミツのような黄色みをおびた色あいといい、コハクか、トパーズのような宝石を彫ってつくったかざりものようです。ふんの玉の中で、

ふんを食べて育ったのに、体には一点のよごれもありません。

前肢^{まえあし}は、スカラベの成虫がきゆうにシヨックをうけて死んだまねをしたときのように、両方ともぎょうぎよくそろえて胸の上におりた^⑥たんでいますし、あとでさやばねになる部分は、深いみぞをきざみ^⑦こんだ帯のような形で前のほうにたたまれていて、背中やおなかの部分はむきだしになっています。

なんだか、麻布でぐるぐるまきにされたエジプトのミイラのような、神秘的なふんいきさ^⑧えあります^⑨」(一九九一年版)

この文章を読む時、アウシュヴィッツからベルゲン・ベンゼン強制収容所へと移送され、寒さと飢えに苦しみながらチフスで命を落とし、そのなきがらがどこへ埋葬されたかも分からないまま、あの世へ旅立ってしまったアンネの二年^⑩あまりの隠れ家生活が、スカラベのサナギのような輝きを放った一瞬であってくれた、というささやかな慰めを感じるのです。

(小川洋子『物語の役割』による)

注 (1) デイッカー先生……第二次世界大戦中、ナチスドイツがアウシュヴィッツへの中継基地としてチェコスロバ

キアにつくったテレジン強制収容所で、収容された子供たちに絵を教えていた美術家、フリードル・デイッカー。彼女自身もアウシュヴィッツに送られ、ホロコーストの犠牲者となった。

(2) スカラベ・サクレ……動物の糞^{ふん}を食べる甲虫、タマオシコガネの一種。糞を丸い玉に整形し、転がして巣穴へ運び、その中に卵を産み付ける。古代エジプトでは太陽神の象徴として神聖視された。

(3) (一九九一年版)……『ファーブル昆虫記(ジュニア版)1 ふしぎなスカラベ』奥本大三郎 訳・解説(一九九一年 集英社刊)からの引用であることを示す。

設問

1 傍線部①について、アンネ・フランクはどのようなことを成し遂げたか。本文中の語句を用いて四十字以内で述べよ。

2 傍線部②について、この文章の筆者小川洋子にとって、「鉢」「皮」「ガラスの棺」「塔」「百年の眠り」に相当するものは何であったか。本文中の一語で答えよ。

3 傍線部③について、ここでいう彼女の「使命」とはどのようなことか。本文中の語句を使って二十字程度で答えよ。

4 傍線部④について、以下の引用文におけるスカラベ・サクレのサナギの描写で多用されている表現を次のうちから一つ選んで記号で答えよ。

ア 対句 イ 擬態語 ウ 比喩 エ 反語法 オ 倒置法

5 傍線部⑤⑥⑦⑧⑨を漢字を用いて表記した場合の漢字をそれぞれ記せ。

6 傍線部⑩について、筆者はどのようにしてそのように感じるか。文章全体の趣旨を踏まえて述べよ。

二 次の文章を読んで、あとの設問（1～6）に答えよ。

科学の世界は、いうまでもなく、すみからすみまでが合理的なものであり、わずかでも神秘的なものや異常なものなど、はいりこむヨチ^①はない。科学は、あきらかに、妖怪変化の敵^②であり対立物なのである。そして、この論法からいけば、空想科学小説は、怪談のたぐいとは、はっきり区別されなければならないことになる。

だが、科学を、異常や非合理と、それほど機械的に対立させてしまって、いいものだろうか。科学の世界を、なんのナゾも陰影もない、単なる数のサバクのように考える考え方は、科学と魔術の区別ができなかった、中世的思考の裏返しにすぎないのではあるまいか。中世の科学観は、地獄の炎にも似た、暗いドロドロした奇怪さでいろどられていた。そして一方、現代の科学観は、あまりにも無味乾燥な、灰色の虚無にいろどられているというにすぎないのだ。いずれにしても、現実には科学がはたしている役割とは、おおよそ無縁なものだといわなければならないまい。

科学は、異常な世界に対する挑戦ではあっても、絶縁ではない。挑戦は、敵のふところにもぐりこまなければ、成り立たないが、絶縁は、敵から顔をそむけて、ドアを閉めてしまえば、それですむ。実際に、科学と対立しているのは、異常世界などではなく、むしろ、異常との対決をこばみ、無視し去ろうとする、日常の保守的生活感情なのではあるまいか。

日常性の秩序にたいする信仰は、異常性を二重の意味で拒否し敵視する。一つには、それが絵そら事であり、不真面目であるという点で、いま一つは、より積極的に、日常の破壊者であるという理由によってである。日常性は、単に守られるべきだけでなく、神聖なものであり、モラルを支える土台石だ^④というわけだろう。そしてこの異常性に対する攻撃は、しばしばそっくり、科学精神にも向けられたことを忘れてはならない。秩序の名において、魔女も科学者も、同じ炎で焼き殺されてきたのだ。日常という神話からみれば、秩序の破壊者という点で、ブルーノーもサドも、変りがなかったのである。

注

- (1) ブルーノ……地動説と汎神論を説いたルネサンス期イタリアの哲学者。
- (2) サド……フランスの作家。倒錯的な小説『ジュステイーヌ』『悪徳の栄え』などからサディズムの名が起こった。
- (3) ヌエ的……どちらともつかないあいまいな様子。正体の知れないあやしげなさま。
- (4) 人間の宇宙飛行……1961年4月、旧ソビエト連邦が宇宙船ボストーク1号の打ち上げに成功し、同船に乗務した飛行士ユーリ・ガガーリンによって、人類初の有人宇宙飛行が達成されたことをふまえている。

設 問

1 傍線部①②④⑥⑦⑬について、カタカナは漢字になおし、漢字はその読みをひらがなで記せ。

2 傍線部③「中世的思考の裏返しにしかすぎない」とはどういうことか。本文に即して最も適切なものを次のうちから選んで記号で答えよ。

ア 中世的思考と同様に、科学がはたしている役割を的確に捉えていないということ。

イ 中世的思考と同じく、科学観は変化しても魔術と区別ができていないということ。

ウ 中世的思考と同じで、奇怪さや虚無といったマイナスイメージがあるということ。

エ 中世的思考とは逆に、科学も魔術も異常や非合理と対立させただけだということ。

3 傍線部⑤「本来は対立物であるはずの科学と妖怪の世界が、機能においては意外に共通性をもっている」について、その共通性とはどのようなことか。本文中の言葉を用いて二十字以内で述べよ。

4 傍線部⑪の慣用句「枚挙にいとまもない」の意味を述べよ。

5 傍線部⑧「一向に」⑨「べつに」⑩「すでに」⑫「見方に」のうち、文法的性質の異なるものが一つある。それを次のうちから選んで記号で答えよ。

ア 一向に

イ べつに

ウ すでに

エ 見方に

6 傍線部⑭「なにか本質的な意味をもっている」とは具体的にどのようなことを指しているか。本文に即して三十字以内で述べよ。

一

1 日記を書くことによって自分とは何かを問いかけ、それを表現し、自己を高めたこと。
読書

2 『アンネの日記』という人類の財産を残したこと。

3

4

ウ

⑤ 行儀

⑥ 畳

⑦ 溝

⑧ 刻

⑨ 雰囲気

6

強制収容所で命を落としたアンネの短い生涯は単なる苦難に満ちた悲劇のみだったのではなく、二年あまりの隠れ家生活の中で成長を遂げ素晴らしい文学に結晶させ、そのことがまるでスカラベのサナギがたとえようもなく美しい輝きを放つのと同一ように感じられるから。

二

1

① 余地

② へんげ

④ ささ

⑥ 矛盾

⑦ 相違

⑬ こうりゅう

2

ア

日常の破壊者の役割を果たしていること。

たくさんあり過ぎて、いちいち数えられない。

5

エ

6

崩壊しつつある、この日常の秩序の反映であるということ。